9―nine―　にじいろ「九天、春雪」

氷桜

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

拙作「９―ｎｉｎｅ―二次創作：にじいろゆめいろきみのいろ。」のカットされたＲ１８部分集です。

此方は完全に不定期・気分次第での更新なので余り期待はしないで下さい。

目次

希み給う―Ｙｕｋｉ　Ｎｏａ０１―　1
そっと、触れて。　4
私に、貴方を。　7
九つの花言葉―Ｋｕｊｏ　Ｍｉｙａｋｏ０１―
「……うん。」　10
「……ねえ、知ってる？」　13
天、白く染まりて―Ｎｉｉｍｉ　Ｓｏｒａ０１―
その想いの名を。　16
天空の彼方。　19
夢現の中の―Ｋｕｊｏ　Ｍｉｙａｋｏ０２―
夢現か、現夢。

希み給う―Ｙｕｋｉ　Ｎｏａ０１―

そっと、触れて。

シーツの下に見えたのは。
いつだったか。
初めて見た時と変わらない、腕で抱き締めれば折れてしまいそうな肢体だった。
見下ろして。
見上げられて。
その距離が、縮まって。
重なって。
数秒、十数秒。
ぷは、とどちらともなく息をした。
「……なんだか、久しぶり。」
「そうだな……随分と、久しぶりな気がする。」
つつ、と白く透明な糸が互いの口元から伸びていて。
それを切らないように。
二度三度と、啄むように。
浅く、深くと粘膜接触（キス）を繰り返す。
「なんで、だろうね？」
「初めての筈、なのにな。」
重ねる度にもっと、もっとと。
その気持ちは強く、深く。
多分、それは俺だけの感情でなくて。
目の前の少女自身も同じ感情で。
そして、互いの状況は互いが一番理解していた。
白い雪のような肌は熱を持ち始めて赤く染まり。
気にしなかったはずの俺自身も、少しずつ直立していって。
熱を、互いへと分け与えるように肌へと触れ合う。
両腕で、彼女を抱き締めて。

ふと浮かんだのは、腕を失いながらも。
最期までを、互いで繋ぎ続けていた巻き戻る前の枝。
失われていく熱を。
消え行く意識を。
俺は、最期まで見届けたあの時。
だからこそ、その力は自然と強くなって。
「……翔。」
「……何だ？」
「何処にも、行かないから。　大丈夫だよ。」
幼子を見守るように、希亜はそう呟いて。
下へと手を伸ばし、熱を持ったその部分を上下へと擦り始める。
手慣れているとはとてもいい難く。
けれど、その分気持ちが伝わるようなその行為。
いつしか、両腕の力は抜け落ちて。
左腕で、彼女を支えながら。
右腕を、彼女の下腹部。
そして、更に下へと伸ばす。
少しばかり感じる湿り気と。
あ、と漏れる小さい声に。
何方ともなく、笑みを浮かべ合う。
「……何度目、だっけ？」
「忘れちまったな、毎度毎度が濃厚だったし。」
「もう。　……でも、私も同じ。」
「なら――――これが初めてだな。」
うん、と再度重なる唇。
舌を伸ばし合って。
ぴちゃり、と水音が跳ねる音がして。
早朝だと言うのに、時間を気にしないように。
眠気など何処かに行ってしまったように、互いを求め合う。
痛いほどに熱が下半身を支配して。
気付けば、少しだけ痺れるように彼女の肢体が跳ねて。

それに重ねるように、白い液体が彼女の肌を染める。
けれど、何方も熱が引くことはなくて。
「……良いか？」
「……うん。」
目と目が、互いしか映していなかった。
シーツは既に完全に剥げ落ちて。
気付けば脱ぎ捨てていた下着の残り香が、汗と。
それ以外の液体の存在を示し続けて。
手と手を、握り合った。

私に、貴方を。

静かに、彼女を抱き留めて。
もう一度、耳に囁く。
吐息が耳元に触れて、少し身体を捩るのを見届けながら。
「良いんだな？」
その言葉が示すように、下腹部をぴたりと当てれば。
濡れそぼった何処かを指し示すように、彼女の手が招き入れる。
「……うん。　翔じゃなきゃ、嫌。」
彼女の腕は、俺を包み。
俺の腕は、彼女を離さないように抱えて。
それは、いつだったかの。
永劫の別れの時の格好にも似て。
身体を強く押し付ければ、少しだけの抵抗と。
それを破るような感覚を下半身に。
首の後ろ、丁度肩甲骨の間辺りに何かを突き立てられるような軽い痛み。
「……ッ。」
「……はぁ、っ。」
お互いに、動かない。
希亜は、二度目の喪失に。
俺は、動いてしまえば直ぐに果ててしまうような感覚と。
彼女を気遣う、綯い交ぜになったような感情を押し殺していたから。
「……ふ、ぅ。」
それから、どれくらいの時間が流れてか。
恐らく、実時間としてはほんの数分位。
けれど、俺達の間で共有していた時間は何倍にも、何分の一にも。
時間という感覚を何処かに置き去ってしまったように、互いが互いを感じていた。
目と目。

唇と唇。
肌と肌。
腕と腕。
指と指。
互いの秘部。
何方も動けないし、動かないけれど。
指の変化、時折重ねるような浅く繰り返す啄み。
背中の痛みが薄れてきた頃。
下半身が、今の状況が自然と思い始めていた頃になって。
「……だいじょうぶ、だから。」
「……ああ。」
小さい、彼女の声が耳に届く。
少し動かすだけで、文字通りに歯を食いしばる事が必要になるほどに。
脳内での経験と、肉体の経験が剥離する。
きっと、それは彼女も同じで。
幾度か、彼女とは肌を重ねたはずなのに。
痛みと快楽に、意識がかき乱される光景が目に入る。
「かけ……る……ッ……。」
ぎし、ぎしと音が鳴る。
軋む音と、吐息と、肌の熱と。
重なるそれらが、更に熱を加速させる。
胸元に舌を這わせる。
希亜が求めるままに、息が苦しくなるまで唇を重ねる。
互いの熱を、感じ続ける。
薄れない。
消えない。
目の前の彼女は、もういなくなりはしない。
たん、たんと肌が当たり。
ぴちゃり、ぐちゅりと水音が跳ね。
声に、互いに快楽が混じり合い。

高昇り続けた熱を。
脚で、彼女は押し付ける。
いいのか、とか。
大丈夫なのか、とか。
そういったことは、既に頭から飛んでいた。
いけないと分かっているはずなのに。
初めだけは、初めてだけはと。
互いが離れることを、俺と彼女は認めずに。
そのまま、中へと白く濁ったモノを吐き出して。
荒い呼吸を重ねる俺と。
とろん、と。　潤んだ瞳で見つめる彼女は。
再び、唇を重ね合わせながら。
吐き出したばかりのはずの、下半身の熱が再び昇るのを感じていた。
彼女もまた。　失った何かを求めるように、もういっかい、と。
耳に囁き、歯を立てた。
甘く、冷たい湿り気を。
俺の全身で感じた、気がした。

九つの花言葉―Ｋｕｊｏ　Ｍｉｙａｋｏ０１―

「……うん。」

彼女を初めて「九條都」と認識したのは。
ナインボールで出会った、可愛い店員さんを知ったずっと後だった。
彼女に声を掛けられて初めて認識し。
けれど、その程度の付き合い方で終わるはずだったのに。
俺が、彼女を意識しなかったのは何故だろう。
そう考えれば考えるほどに、思い付く答えはマイナス方面。
身の程に合わない。
彼女は高嶺の花で。
俺は、何処にでもいる人付き合いが苦手な一学生。
そんな。
同じ学校に通うクラスメイト、程度の繋がりしか無かったのに。
メビウスフェスから始まった、アーティファクト騒動から一月も経たない間に。
俺達は結ばれ。
そして、運命の悪戯として。
別の可能性を幾つも経て。
今、こうして腕の中にいる。
とくん、とくんと心臓が落ち着いて鳴っているのを感じた。
緊張しているのは俺だけなのか。
それとも、彼女もなのだろうか。
彼女特有の、何処か花を思わせる香りが漂った。
特に以前は匂いになんて注意を払っていなかったのに。
誰かがこうしてやってくるようになって。
何度も、手の中で。
何度も、目の前で。

失う度に残る、鉄錆にも似た特有の匂いを思い出す度に。
忘れないようにと、それぞれの香りを無意識に憶えていた。
「……翔、くん？」
「あ。　……悪い、変だったか？」
「ううん。　……私こそ、変じゃない？」
そうおずおずと問い掛ける彼女の目は潤み。
思い出すのは、ゲームセンター帰りのあの光景。
互いに、気持ちを吐露して。
すれ違わずに済んだ、あの時。
「何でだ？」
「汗臭いの……どうかな、って。」
「だから汗流してからにしようって言ったんだが……。」
「私は――――嫌いじゃ、ないよ？」
そう呟いている少女。
度重なる行為。
互いが互いを求め続けた日々。
蜜月と言うべきか、或いは肉欲に溺れていたと言うべきか。
私服姿で、制服姿で、喫茶店の服装で。
彼女は妙に勉強家で。
それに負けじと、ネット上で調べた行為で返すような。
対外的には、唯の彼氏と彼女。
本質的には、籍を入れていない夫婦のような関係。
そして、今。
もう一度結ばれようとしている俺達。
なら、返す答えは。
「……あのな。」
「ふぇ？」
「俺が、嫌だと思うか？」
顎を上に持ち上げて、眼と眼を合わせるように呟けば。
ちょっとの放心。
そして、漏れる答えと花のような笑顔。

「……ううん。」
「だったら、答えは要らないだろ。」
「……でも、翔くんの口から聞きたいな。」
この、我儘なお嬢様。
けれど、今は俺が独り占め出来る。
そんな幸福を込めて。
「……都だったら、どんなのだって好きだよ。」
「……うん。」
唇を、自然に重ねた。
感じた匂いは――――ああ、そうだ。
薔薇の。

「……ねえ、知ってる？」

少しだけ感じた匂いの元。
俺の家のシャンプーとかリンスとか。
そういったものとは当然違って。
けれど、確かに都の匂いだって感じるのに。
普段のものと違う、と。
先程思ったことと、逆に。
感じるほどに、彼女を受け入れる度に。
そう思い、問い掛ける。
「なあ、都。」
「なぁに？」
糸が伸びる。
舌で巻き取る。
甘い、と感じるのはきっと気の所為。
気分でしか無いはずなのに。
ずっと前から、そう思っている。
「……何か、変えたか？」
そんな言葉を、ほんの十数センチの距離で問い掛ける。
目と目が触れる、と。
そんな表現をされるほどの距離で。
小さい吐息を、肌に感じる。
「……分かるの？」
「分かるさ。」
「……なんでだろ。　変かな、とも思うんだけど。」
「ああ。」
「嬉しい、って思っちゃった。」
はにかむ彼女の首元に、もう一度唇で触れて。
それを受け入れながら、彼女は耳元で囁き返す。
「……花言葉、って信じる？」

女の子らしいな、とも。
彼女らしくはないな、とも。
そんな風に思いながら。
「信じるかどうかって言われれば……どうかな。」
「だよ、ね。　女の子でも……知ってるかは、わかんないもん。」
胸元の、彼女の服を縛る部分を緩め。
はらり、と舞い落ち。
いつも着込んでいる上着と、彼女の特徴的なワンピースが顕になって。
上目遣いと、下目遣い。
彼女と、俺の視線が交差する。
「薔薇って……花言葉が、違うんだって。」
「違う？」
「一本、二本。　本数と……色と。」
「へえ……。」
耳から耳へ抜けていく。
彼女の、聞いていると落ち着く声が言葉を紡ぎ続けながら。
互いの服装を、脱がし合って。
「なら……。」
そんな会話と、身体中への口付けと。
互いが互いのものだと示す、周囲に言うためのように。
けれど、彼女の肌に痕を付けたくはなくて。
そんな、中途半端な感情で。
「どんな、意味なんだ？」
でも。
少しずつ、熱と。
そんな色んな行為を経て、赤くなっていく彼女を見て。
脳裏に浮かんだのは、赤というよりは。
少しだけ赤い、淡いピンクの花。
「……笑わない？」
「笑うかよ。」

「そう、だよね。」
さっきも聞いたのにね。
そうだよ。
声にならない声で、二人で共に抱きしめあって。
その言葉を切っ掛けに、大事な一線を踏み越えようとするように。
互いに、それを理解しているように。
都の言葉を待ちながら、下半身を擦り合わせ。
受け入れるように、行き先を彼女が導きながら。
「私の、名字。　九本の、薔薇でね。」
「……ああ。」
「いつでも、貴方を思っています――――って。」
唇と、言葉と、彼女と。
それらを、俺が受け入れるように。
俺と、君と、二人と。
何があっても、離れないように。
それは世界が変わっても、同じだよと。
そうして。
影は、重なって。
少しだけ、甘い声色と。
甘い、匂いが部屋を支配した。

天、白く染まりて―Ｎｉｉｍｉ　Ｓｏｒａ０１―
その想いの名を。

「……つかれた。」
たまには、と。
そんな気分で風呂を入れ、身体を沈めている時だった。
暫くの間に色々起きたことで、多分芯の辺りに疲労が溜まっていたのだろう。
……後は、そう。
この数日で関係を思い出し、結ばれた二人との出来事もあったのだと思う。
そんな思い出すのも小っ恥ずかしい事と、二人の裸体を思い出して熱が上と下に集まって。
慌てて首を振ったそんな時。
「じゃじゃーん！」
「……は？」
だーん！と。
そんな物音を立てながら扉を思い切り開けてきた天（バカ）が一人。
何事だよ、と思ってしまって一瞬思考が止まった。
「ばっ、おまさっき入ったろ!?」
「洗っただけで全然温まってないよ！　というわけで失礼しまーす。」
「自慢気に言うところじゃねえよ!?」
その一瞬の間を活かし。
極当たり前のように、ずっと昔のように。
覆い隠そうともせずに、浴槽へと入り込んできた。
「……おお。　やっぱりちゃんと入ると違うね。」
「良いから出ろよ!?」
元々が一人用のものだからこそ、お湯が溢れ周囲へと撒き散らされる。

しかも入り方は、俺自身に抱き着くように。
顔と顔を見合わせる形で、俺が出ようとするには無理に天を退かす必要がある入り方。
……詰んだ。
「え～いいじゃん何か昔みたいでさ～。」
「お前の言う昔って何年前だと思ってるんですかね……。」
「え？　ええっと……。」
「そこは真面目に答えるところなのか？」
「違うの？」
俺に聞くな。
顔を入口側に向け、真正面からは決して見ないように。
言い方を変えるなら、〝目を合わせない〟ようにしながら。
それでも、触覚と聴覚は正確に今の状況を伝えてくる。
ちゃぷん。
水滴が水面を揺らす音でさえ、今の俺には強烈にも感じた。
相手は血の繋がった妹なのに。
或いは、血の繋がった妹だからこそか。
抱いた記憶があり、実際には抱いた経験が消失している。
そんな、明らかな矛盾こそが湯気で満ちた空間という事も合わさって妙な思考へと至ってしまう。
「……で、退いてくれないか？」
「なんでですかお兄たま。」
「出るからだよ……！」
「いーやーでーすー。」
そう言いながら胸を押し付けてくるのをやめろ。
更に身動きが取れなくなる。
それはまあ、生理的な反応を含んで。
「こうまでしてるんだし、少しくらいは良くない？」
「お前のその〝少し〟は絶大な問題があるって分かってるよな!?」
「私は問題ないし！　寧ろバッチコイだし！」
「記憶戻らないほうが良かったんじゃねえかな……。」

「そういう事言うの禁止！」
更に距離を近付けてくる。
間が空いている、と言うよりは既に密着している、という状況に近く。
傍から見れば、既に言い訳の出来ない態勢。
……視界の隅に映ったこいつの顔もまた赤く。
自分でやっていて恥ずかしいのだというのは見て取れた。
「……ね。」
「……なんだよ。」
少しの静寂。
「……おねがい。」
「……何を？」
一呼吸。
「……おにいちゃんが、いいの。」
二呼吸。
「私のぜんぶ、もらって？」
三呼吸。
どちらともなく、吐く息と。
間に伝わる粘着性の液体が、口元から伸びていた。

天空の彼方。

湯気が立ち込める空間に、水音が響く。
俺と、もう一人しかいないそんな場所。
本来は一人が当たり前の場所に混じる、ある種の異物。
それがどちらにとってのものなのかは扨置いて。
「ん……ッ」
ぴちゃり、ぴちゃりと。
液体が落ちるのではなく。
何かが降り注ぐだけではなく。
一人と一人が触れ合うからこそ立つ水音。
「……。」
「……どうしたの、死んだ魚みたいな目ーして。」
「いや、何だろうな……。」
流されるにも程があると言うか。
本来は自制して然るべきっつーか。
色々とマイナスな感情だけが積み重なっていく。
此奴の願いを断るのを諦めたとはいえ。
過去に、同じことをしてしまった枝があるとはいえ。
「兄と妹」なのだから。
「男と女」ではなく。
――それらを知ってこそ、禁忌と呼ぶのだというのを否が応でも理解している。
「気持ちよくない？」
「そういうストレートなこと言うのやめてくれません？」
「だってー。」
未だに位置は変わらずに。
俺の上に乗る天は、その体勢だからこそ視線を逸らすことを許さない。
時折前後し、自身の秘部と俺のモノを擦り合わせては声を漏らす。

そんなことを繰り返し、どれだけの時間が経ったのか。
数分――――ではない、と思うのだが。
「お兄ちゃん。」
「……何だよ。」
「嫌なら、良いよ？」
不安そうに見る目は、結局の所。
互いにイケナイことだと理解しているからこその感情。
「……ぁー。　悪い……いや、謝るのも何か変なんだが。」
「こうしてられるだけでも、幸せなのは分かってるから。」
少し腰を浮かせれば、此奴の任意のタイミングで最後まで行ってしまえる。
けれど、それは此奴自身が望まない。
根底にあるのは、結局。
俺へ抱く感情が故だからこそ、自分本位のみで行動を起こさない。
受け入れられないと諦観を重ねていたからこそ、諦める選択肢を選ぶ手は軽く。
「そうじゃない。」
「……？　え、じゃあ何？」
「お前がそんな苦しそうな顔する必要も無いってことだ。」
それら全てを諦めると、一度決めた以上。
こうして迷い続けるのも――――言ってしまえば、無駄な時間なのだ。
目の前の、女（いもうと）を抱き締める。
柔らかい肌が、腕を通して温度を伝える。
わ、と小さく漏れた声を無視して。
「天。」
「……なぁに？」
「もう遅いからな。」
もう少し、方法はあったのだろうし。
もう少し、抱いていた理想はあったのだろう。
けれど、俺がしてやれると――――したいと思うのは、今ここで。

湯の浮力で、少女を持ち上げた。
抱き合うように、彼女を降ろした。
大切な相手は、自分の指で自分の秘部へと導いて。
少しばかりの抵抗の後に、何かを貫いた感覚があった。
――――たった二人になってしまった、ありえない枝の果てを思い出し。
――――少しばかりの痛みと。　大多数の幸福を浮かべながら。
男と女は、一つになった。
それが、どんな意味を持つのかは。
二人が、一番強く知っていた。

夢現の中の―Ｋｕｊｏ　Ｍｉｙａｋｏ０２―

夢現か、現夢。

静かに聞こえ始めた吐息と言うか、寝息の音に。
それを邪魔しないように、私はゆっくりと頭を横へ傾けた。
いつも見ている顔。
いつも見ていた顔。
そんな今の／前の記憶が、私の中の「彼」を想う。
少し照れ屋で、人に対して気を使って。
「友人」というのも余り多くはないけれど、それでも。
彼のことを深く知る人間は、嫌おうとは思わないんだろう。
そんな当たり前のことを思いながら、そっと手を伸ばす。
髪に、顔に。
幾度か触れて、当たり前のように近くにあったようにも思えて。
けれど簡単に失ってしまうものだと、私は知っている。
知ってしまっている。
それは、私自身の罪でもあって。
それは、私自身が負うべき罰のようでもあった。
（……どうなんだろうね。）
私は最初に「仲良くなりたい」と思って。
ふとした切っ掛けで、「仲良くなっていた」事を思い出して。
その記憶が全てとは、決して私は言わないし。
言いたくもないけれど――――それでも、「今の私」はどうなのだろう。
（引っ張られてるのかな、それとも。）
頬を、額を。
時折変わる顔色を眺めながら。
指先で触れて、熱を感じるだけで……安心する。
（今の私には、分からない。）

昨日見てしまった過去。
無かったことにはならない、別の世界(えだ)。
彼を悲しませた。
私が悲しんだ。
共に歩んだ。
永劫に別れた。
本来の私では知るはずもなかったそれらは、彼の言う「相棒」に依って齎されたモノなのだろうか。
或いは、悪意ある誰かの干渉によって送り込まれた思考(ウイルス)なのか。
……昨日から、その境目が薄れてしまっている。
手を、彼から離した。
少しだけ起き上がる。
かさり、と布団が服から落ちて。
彼の匂いから、少しだけ離れた気がして。
「ね、翔君。」
彼には決して聞こえないように。
彼を決して起こさないように、囁くよりも小さな声でそれを呟く。
「絶対、いなくならないでね。」
そうしてしまえば。
私達はどうなってしまうか分からない。
そんな、確信にも似た言葉で彼を想う。
彼は答えるはずもなく。
私もそれを告げる気もなく。
歪な私達の関係は、歪なままで進むのだろうか。
――――多分、それは違う。
今の私達は、歪だからこそ成り立っているのだから。
だから。
だからこそ。
「大好き。」
額に、頬に、首筋に。
触れる程度に唇を重ねる。

それこそが、私の思いを伝える方法なのだと。
言葉には出来ない、ココロの中にある黒い何かを伝える方法なのだと。
彼の中にある、背負わざるを得なかったモノを引き取る方法なのだと。
そんな錯覚を、自分に思わせながら。
私はまた、彼に口付けた。